世界の難民情報を伝える

UNHCR NEWS

United Nations High Commissioner for Refugees

Number 12

1999年 第3号

Contents

Special Report

現地報告：中部アフリカから
ブルンジ帰還民の笑みに支えられて

Information

コソボ：ご支援ありがとうございます
東ティモール：緊急現地報告
UNHCR東京事務所に新代表着任

UNHCR
国連難民高等弁務官 日本・韓国地域事務所

SPECIAL REPORT

現地報告：中部アフリカから

ブルンジ帰還民の笑みに支えられて

UNHCRブルンジ
ムインガ支所
保護官　根本かおる

写真提供：筆者

保護者のいない子どもたちへの援助に携わるOXFAMケベックの職員と。右が筆者

今なお世界の難民・避難民数の3分の1を占めるアフリカ難民。ここでは難民問題の解決に向けて、紛争当事者や国際社会の介入による和平への努力が繰り広げられる一方、UNHCRをはじめとする人道援助機関は困難な活動を続けている。

しかし、その地道な人道援助努力も、武力衝突によって崩れ去ってしまうのもUNHCRが直面する現実である。

今号では、99年10月半ばまでブルンジ難民の帰還受け入れを担当していた日本人職員の現地報告をお届けする（原稿は、「追記」を除き今年3月時点で執筆された）。

ブルンジとは

ブルンジの人口は約620万人。その85%がフツ族、14%がツチ族という構成になっている。ベルギーによる委任統治を経て、1962年に独立。それ以降、クーデターにより政権がたびたび変わってきたが、1993年、選挙によってフツ系の大統領が誕生した。

しかし、同年10月、軍の陰謀で大統領が暗殺され、翌94年、再びフツ系の大統領が飛行機事故で死亡し、これをきっかけとして、フツ系、ツチ系の部族対立が内戦に発展した。この間20万人もの生命が失われたと言われている。さらに、タンザニアの難民キャンプに今でも28万人近いブルンジ難民が住み、ブルンジ国内でも60万人近くが国内避難民として元々住んでいた家を追われている。

UNHCRは現在、タンザニアにある難民キャンプからの帰還を積極的に推進してはいないが、側面支援を行ない、自主的な帰還を望む難民への移送や物的支援とともに、二つの支所（ムインガとルイギ）が再定着状況をモニタリングしている。98年には、ムインガ近くのコベロ国境検問所を通って1万人近くが帰還した。

96年、無血クーデターでツチ系のブヨヤ大統領が政権を握ったことに端を発し、近隣諸国が経済制裁を課した。しかし、制裁がブヨヤ政権の民主化努力や一般市民に与える悪影響が考慮され、99年1月に制裁は解除された。日本政府もこの直前の98年12月にブヨヤ政権を政府として承認した。

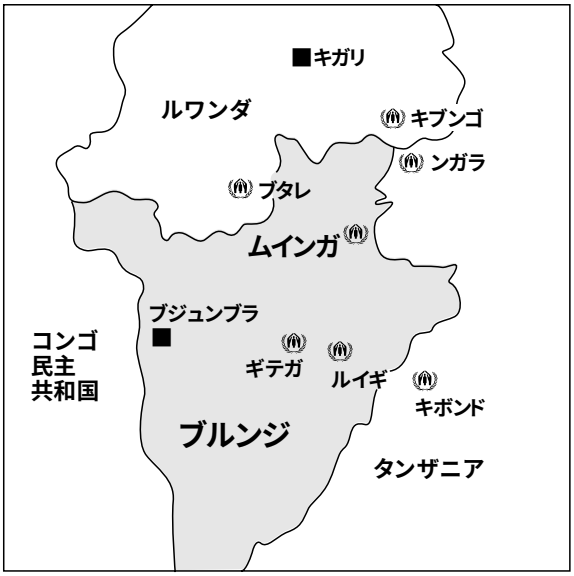
難民受け入れの最前線基地に

中部アフリカの小さな内陸国、ブルンジ。ルワンダ、コンゴ民主共和国（旧ザイール）、タンザニアに囲まれ、首都ブジュンブラはタンガニーカ湖に面している。ブジュンブラから車で山がちの道を3時間半行くと、私の駐在するムインガにようやく到着する。国の北東部、標高1800メートルの高原地帯にあるムインガは隣国タンザニアとの国境まで車で20分。UNHCRムインガ支所は、タンザニアのキャンプから帰還するブルンジ難民の受け入れ最前線基地の一つである。

朝起きれば、眼下の谷に霧がかかり、水墨画さながらの幻想的な世界が堪能（たんのう）できる。日中は、アフリカの強い日射しの中できらめく山々の緑に目を奪われ、夜には文字通りの「満点の星空」に息を飲む。「アフリカのスイス」という名にふさわしい美しさとは裏腹に、この国はツチ系とフツ系との間の民族対立から殺りくを繰り返し、今なお28万人近くのブルンジ難民がタンザニアの難民キャンプで暮らしている。隣国ルワンダが同じツチ系とフツ系の対立から94年に大量虐殺を起こして世界的に知られたのに対して、このブルンジ

の直面する悲劇は、93年の大統領の暗殺以降、激化した民族対立で20万人もの命が失われたにもかかわらず、ほとんど知られていない。ブルンジの在留邦人数が実にわずか1名（つまり、私のみ）という状態では、日本でこの現状を知る人が少ないのも当然のことだろう。

対立する当事者間で完全な和平締結というところまでには至っていないながらも、和平に向けて様々な動きがあり、国内状況も少しずつ改善の方向に向かっている。それを受けて、タンザニアのキャンプから難民が長年の異国での生活に終止符を打ち、故郷ブルンジに帰還している。UNHCRムインガ支所は、タンザニア側のUNHCR事務所と協力して、バスを仕立てて難民の帰還の便宜を図っている。その帰還民たちが故郷で再定着し、再び難民として国を離れることのないようモニタリングするのが、UNHCR“プロテクション・オフィサー（保護官）”としての私の仕事だ。



生まれ故郷をめざす人びと

毎週木曜日、オフィスは総出で、タンザニアに接するコベロ国境検問所に出かけ、帰還民を乗せたUNHCRタンザニア事務所のバスが到着するのを待つ。バスの到着で、閑散としたコベロ国境は急に活気づく。ブルンジ難民たちは長年にわたるキャンプ生活を支えてきた家財道具一式をかかえてバスから降り、入国管理官の点呼を受けてブルンジ側での登録を済ませる。多い時で一度に500人前後、平均で2〜300人が帰ってくる。そのほとんどを女性と子どもが占める。

彼らは、この後、トウモロコシ、豆など3か月分の食糧や石けん、ビニールシートなどの配給を受け、生まれ故郷の町までUNHCRのトラックで帰っていく。国境で点呼を受けている時は固い表情だったのが、生まれ故郷に近づくにつれて満面笑みに変わっていくのを見るのが、私は好きだ。しかし、支給品は売れば結構な額になるので、支給品欲しさに、帰還するや否や再びタンザニアのキャンプにもぐり込んで何食わぬ顔でまた帰ってくる不届き者もいるので、常に目を光らせていなければいけない。

ゼロからの再出発を支援

UNHCRの仕事は、ただ難民を連れて帰るというだけでは終わらない。ここからが難しいところで、長年離れていた故郷で問題なく再定着しているかモニタリングし、支援している。また、帰還民を受け入れる地元地域全体の利益にもなるようにと、内戦で壊された学校や診療所を修復したり、道路や橋の整備を手がけている。

私は、毎日のようにブルンジ人のアシスタントと共に帰還民を戸別訪問して聞き取り調査をし、問題がある場合は、解決に向けて各方面にお願いしてまわる。時に、帰ってはきたものの長年いなかった間に他人に土地をとられてしまったケースは、自給自足が生活を支えている実状を考えると、深刻な問題だ。ブルンジの人口密度は1平方キロあたり228人で、アフリカ全土でルワンダに次いで2番目に高い。そのため、土地不足の問題は帰還民にとどまらず、UNHCRは沼地を干拓して、帰還民を含めて土地のない人々に分け与えている。

この他にも、子どもを学校にやりたくても授業料が払えない、税金を払えと言われたが次の収穫期までお金が入らないので待ってもらいたい、病気がちだがお金がなくて病院に行けない、身分証明書を申し込んだがなかなか発行してくれなくて“袖の下”を要求されたーなどなど、さながら「よろず相談所」である。これらの問題は市長レベルの裁量に任されていることが多いので、毎日、市長をつかまえるのに必死である。

世界の最貧国の一つなので、「お金がない、食べるものがない」というのは、誰もが直面している問題である。しかし、帰還民は何年も故郷を離れ、根こそぎ状態にあった訳だからゼロからの再出発で、その困窮ぶりは人一倍である。以前住んでいた家は内戦で破壊され、ワラとバナナの葉、UNHCRから支給されたビニールシートを組み合わせた掘っ建て小屋からの生活再建だ。

さらに、夫を失い子どもを何人もかかえた母子家庭の苦労は並大抵で

UNHCR/K.Nemoto

ブルンジ側の国境で。親たちが帰還登録をする間、高カロリー・ビスケットをほうばる子どもたち。登録に時間がかかるため、倒れてしまわないよう水とビスケットが配られる。

はない。おまけに、ブルンジの法律と習慣では女性に土地の相続権がないので、元住んでいた所に戻っても、夫の遺族から口べらしのために追い出されてしまう。他方、結婚すれば夫の家に入るものと社会的に見なされているので、実家に受け容れてもらえる確証もない。このため、帰還民女性の土地問題や相続問題は実にきめ細かなフォローアップが必要だ。まずは「村長」に彼女の窮状を説明し、次に夫の遺族に会って言い分を聞く一方で、どうにか折り合いがつかないものかお願いする。再びフォローアップのために足を運び、途中経過を聞いて再度よろしくお願いする。村には「長老会」のようなものがあり、これが合議制で解決策を決めることが多いのだが、女性側に有利な決定が下されても、これを遺族がすんなり受け入れるとは限らないので、またフォローアップに出かける。おまけに、日本のように電話で会う約束を取りつけられるわけもない。車で行けない所に住んでいるケースも多いので、当人をつかまえるだけでヘトヘトになる。

また、帰還民の逮捕もまれながらあるので、公正な裁判が行なわれるようモニタリングするのも、重要な仕事だ。

ムインガでの暮らし

ムインガのUNHCR事務所には国際職員が私の他に3名（中央アフリカ共和国、イタリア、スウェーデン出身）、NGO（非政府組織）の外国人職員が常時10人前後（スーダン、アメリカ、フランス、エチオピア、ケニア、ソマリア、チェコ、アイルランド出身）駐在している。それぞれ別に家を見つけていて、共同生活ではないものの、常に行動を共にしているので、ほとんど「同じ釜の飯を食べた仲」である。夕食やビデオ上映会、仕事のあとの「ちょっと一杯」をセッティングし、何とか単調になりがちな生活にアクセントをつけている。以前は治安状況が悪くてハイキングなどもってのほかだったそうだが、今は何の支障もなく家の裏の谷にトレッキングに出かけられる。あたり一面が赤土なので、そのままの土壌を利用して、クレーのテニスコートもできた。地元の若者でにぎわうディスコもオープンし、週末には外国人仲間でくり出している。断水や停電は日常茶飯事で、身体中石けんの泡だらけの時に断水して途方に暮れることもあるが、そうした物質的な問題よりも、何よりも辛いのは、通信手段が限られていて、思うように家族や友人と連絡がとれないことだろうか。

厳しいブルンジの現実

ブルンジで活動する国連諸機関が98年末に共同で作成したリポートによると、非識字率は66%、人口620万人中、平均32万人が日々、食糧配給を受けて飢えをしのいでいるほか、乳児死亡率が1000人中136人。人口の10%近くが、難民として国境を越えてはいないものの家を追われて国内に滞留している。こうした絶望的な状態に対し、国連としては、これ

UNHCR/K.Nemoto

ようやく帰り着いたブルンジ。ここからトラックに乗り替え、さらに故郷へまでの旅が続く。

UNHCR/K.Nemoto

ムインガの市場

までの応急処置的な緊急人道援助中心から、より長期的な再定着に向けた地元地域支援への移行を模索している。

これほどまでに深刻な現状を目の当たりにして、自分の果たせる役割がどれだけのものか自問自答することもしばしばだ。しかし、帰還民が生まれ故郷に着いた時に見せる笑顔や、問題がうまく解決して帰還民が喜ぶ姿を目にした時の手ごたえが、今の私の心の支えである。

（99年3月 記）

追記：あまりに脆弱な平和

私たちUNHCR職員の仕事は、ブルンジの人々がまた平和に暮らしていけるように、毎日一つひとつ積み木を積み上げていくようなものだった。しかし、そうした積み木の山も、この10月12日の事件によって一夜にして音をたてて崩れ落ちた。

UNHCR、ユニセフ、WFP（世界食糧計画）、そしてUNDP（国連開発計画）からなる国連機関の共同調査団が、ブルンジ南部のルタナ州の、タンザニア国境から3キロの地点に視察に行ったところを、反体制派と見られる武装グループに襲われ、国連職員2人を含む9人が死亡。UNHCRの同僚もう少しで生命を落とすところだったが、九死に一生を得て何とか逃げることができた。ブルンジ軍の護衛付きででかけたところを襲撃され、軍の護衛がかえって反体制派の関心を呼び裏目にでた、とも考えられる。人道援助に携わる者として、いつ自分が同様の場面に遭遇するかもしれないと思うと、背筋がゾッとする。

この事件を受けて、国連関係機関は、ごく一部の緊急援助を除き、活動の停止を決定。必要最低限の職員を残して、国際職員を避難させることもあわせて決定した。私たちUNHCRムインガの国際職員は、10月15日に首都ブジュンブラに移動し、19日にはケニアのナイロビに避難した。現地職員に別れも告げられないまま、必要最低限の物だけを携えてのあまりに慌ただしい出国だった。写真立てに入れた家族の写真も、本も、洋服もそのままだった。

残された現地職員はこれからどうなるのか、ブルンジの人々はどうなってしまうのか、私たちのブルンジでの努力は一体何だったのか――事件に直接巻き込まれたわけでもないが、よく眠れぬ夜が続いた。そして今、私は、もうブルンジに戻ることなく、次の赴任地コソボに向かう。

（99年11月８日 記）

●その他のアフリカ地域では

UNHCRはアフリカ全土42か国で、合計約630万人（99年1月1日現在）を対象に2000人の職員が援助活動に携わっている。

援助対象者の内訳

難民	330万人
国内避難民	160万人
帰還民	130万人

1998年中に帰還した元難民数

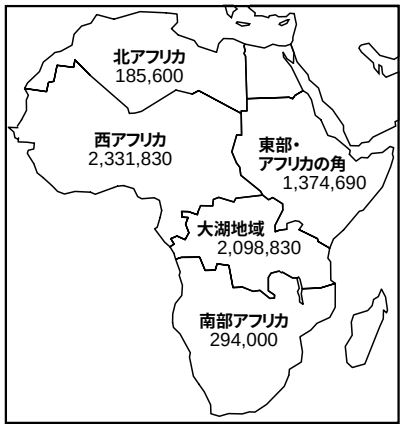
リベリア	235,700人
シエラレオネ	193,800人
コンゴ民主共和国	62,400人
ソマリア	48,100人
マリ	27,000人
ブルンジ	23,600人
アンゴラ	21,800人

予算

UNHCRがアフリカで展開中の６つの緊急援助に必要な約1億6000万ドルのうち、10月末現在で調達できているのは、1億2500万ドルのみ。

さらに詳しい情報をご希望の方は、「難民」誌1999年3号をご参照ください。

アフリカ地域別 難民・避難民数



コソボ ご支援ありがとうございます

概況

ピーク時には約80万人をこえたコソボ難民・避難民も、大半は自治州内に戻った。また、「人道避難計画」によってドイツやトルコなど地域外30か国に逃れた人々の帰還も進められている。

その一方、民族間の緊張が高まり、非アルバニア系住民に向けられる脅しや暴力、強奪、放火などの犯罪行為が続いている。「第2回 コソボにおける少数派民族の状況調査」（9月6日発表）によると「セルビア系・ロマ系住民は、恐怖（身の危険）を感じており、買い物など移動の自由が無いため、コソボに留まることが難しい」と報告している。セルビア軍撤退とコソボ平和維持部隊（KFOR）の展開後にコソボを脱出した非アルバニア系住民は17万人を上回った（99年7月29日現在）。UNHCRは10月中旬、少数派の民族が、自分たちのコミュニティー以外の地域に通院や買い物、友人や家族の訪問ができるよう、バスの運行を始めた。バスの安全確保はKFORが担当している。

日本からの支援

コソボ難民・避難民ために寄せられた日本の皆様からの暖かいご協力に深く感謝いたします。

99年10月31日現在、個人やさまざまな団体から、UNHCR日本・韓国地域事務所に寄せられた寄付金は、合計約1億7300万円（3786件）になった。これは、世界全体の民間から送られた2100万ドルのうちの1割弱、イタリア、米国についで第３位にあたる。

さらに、日本政府による拠出金は、99年9月半ば現在で、3910万ドル（43億4000万円）。

UNHCRのコソボ関連（難民・避難民・帰還民すべてを含み、99年12月末まで）の援助予算は約3億3300万ドル、９月半ばまでに得られたのは、2億6970万ドル（81%）だけである。

援助予算内訳（単位:米ドル）

人権・保護活動	38,848,029
食糧	14,651,970
保健・教育・コミュニティーサービス	46,342,767
住居および食糧以外の緊急援助物資	137,206,966
運営管理その他	95,917,010
合計	332,966,742

カギとなる住居補修事業

予算の41%を占める「住居・食糧以外の緊急援助物資」は、コソボの人々がバルカンの厳しい冬を無事に越えられるかどうかのカギをにぎっている。家屋が破壊されてしまった一家族あたり一部屋を補修するための住居キット、毛布や衛生用品、ポリタンク、台所用品、石けんなど生活必需品が含まれている。

住居補修事業は、UNHCR、ECHO（欧州共同体 人道援助局）そして米国OFDAが行なっている。

① 緊急住居修理キットーUNHCRはNGO 2団体と実施契約を結び、コソボ全域で住居修理キット1万6000個の配布を急ピッチに進めている。内容品は、釘や屋根・窓用のプラスチック資材、板など。11月15日現在、特に破壊の度合いが大きいペチ、ジャコビツァ、ミトロビツァ地区を中心に、コソボ全域300村へ、1万2500キット（78%）の配布を完了した。UNHCR、ECHO、OFDAによる援助全体でおよそ38万人分のシェルターが確保される予定。

② 大型屋根用キットー18人（約２家族）が収容可能な大型屋根用キットもNGO14団体を通して90村に配布しており、取り付け作業が進行中。

作業すべてが完了すれば、家を失った全住民の仮住居が用意できることになる。

さらに、UNHCRは独自に暖房可能なテント1万5000枚と室内や建物の中に立てられるテント2万枚を提供して越冬手段を強化している。特に援助の必要な弱い人々のための多目的ストーブ3万個と燃料も配布中。

また、日本政府から寄贈されたプレハブ住宅500戸はすでにコソボに到着し、日本のNGOピース・ウィンズ・ジャパン（PWJ）がミトロビツァとペチにおいて、JEN（日本緊急援助グループ）がデチャニにおいて組み立て・敷設作業を行なっている。

（UNHCR NEWS No.11参照。）

コソボ緊急援助活動のための購入物資（1999年4月〜9月）

品名	数量	単価（米ドル）
（救援物資運搬）車輌	200	32,000
毛布	1,314,650	3
ビニールシート（ロール）	2,834	68
ビニールシート	284,490	7
テント	38,255	181
ストーブ	45,408	78
マットレス	848,832	14
台所用品セット	95,840	21
石鹸（メートルトン）	783	600
衛生用品セット	1,200,000	4
プレハブ倉庫	29	12,000
女性・子ども服	520,000	3
窓	3,000	66
木材（立方メートル）	10,560	176
建築用資材キット	2,000	672
赤ちゃん用品	5,000	14
ベッドシーツ	20,000	3

①上記には、難民の登録や身分証明書を発行するためのコンピュータやプログラム開発費、食糧、衣料、仮住居、備品、人材のように数百万ドル相当の寄付物品は含まれていない。
②同期間内のUNHCRの支出総額は、約1億5000万ドル。

東ティモールからの緊急現地報告

独立の是非を問う8月30日の住民投票の結果、東ティモールの人びとはインドネシアからの独立を選択した。しかし、独立に反対する民兵によって、略奪や放火、殺人などの暴力行為が激しくなり、多くの東ティモール住民が西ティモールへと追いやられた。UNHCRは、こうした難民と東ティモール内の避難民に対して緊急支援を展開している。10月9日から東ティモールのディリに急きょ出張した斉藤千佳からの報告をお伝えする。

UNHCR日本・韓国地域事務所　渉外官　斉藤千佳

10月13日、私は西ティモールの州都クパンから約90人の帰還民を運ぶ飛行機に同乗して、東ティモールのディリに向かった。帰還する人々はまず、クパンの空港で搭乗登録や荷物のチェックを済ませ、飛行機に乗り込む。約半分は子どもで、そのほとんどが飛行機に乗るのは初めてだ。旅客機のような窓はないので外は見えず、みんなとても不安そう。中には気分が悪くなってしまう子もいる。私の前に座っていた3歳ぐらいの女の子は、飛行機がゆれるたびに首から下げた十字架を握り締め、お祈りをしていた。

約45分の飛行中、飲み水とキャンディーが配られた。ディリの空港に着陸したとき、ホッとした表情の子どもたち、うれしさで歓声を上げる人々、歌い出す人々など、みんな故郷の地に再び帰れた喜びでいっぱいだった。

空港からは、トランジットセンターとして使われている競技場へトラックで移動し、そこでまず、UNHCRの職員から、搭乗時に預けた荷物や、帰還パッケージ（１家族あたり、毛布１枚、水汲み用ポリ容器1個、石けん2個、ビニールシート2枚、米１人あたり５kg）を受け取り、健康診断の手順などの説明を受ける。競技場の外は迎えにきた親戚の人々でいっぱいだ。すべてを終えて外に出ると、皆、強く抱き合って、再会を喜んでいた。

しかし、この心温まる光景とはうらはらに、私が空港からオフィスに向かう途中、車の窓から見たのは、町中、黒く焼けこげた家や建物の残がいだった。

インドネシア政府の統計によると、西ティモールへ逃れた東ティモール難民は約25万人にのぼる。そのうち12～15万人が帰還を希望していると推定される。

UNHCRはほかの国際機関やNGOなどと協力して、10月8日から東ティモール難民の自主帰還プロジェクトを進めている。空（飛行機）、海（フェリー）、と陸（トラック隊）の3つの方法で11月22日現在5万5000人以上が西ティモール、バリ島、ジャカルタ、オーストラリアのダーウィンなどから東ティモール に帰る事が出来た。現在も毎日平均1200人の人々の帰還を支援すると同時に、空港や港から故郷の町や村まで帰る交通手段の提供や、雨季をしのぐための緊急住居修復プロジェクトなどを進めている。ぜひ、東ティモール緊急プロジェクトへ皆様からのご支援をお願いしたい。

99年11月20日 記

11月末現在で帰還民数は11万人
最新情報はUNHCRのホームページを参照

ティモール緊急募金の送り先

（郵便局の郵便振替用紙をご利用ください）

送金手数料が免除となる次の郵便振替口座を開設しました。
（旧口座もご利用いただけますが、手数料免除扱いにはなりません。）

口座番号：00190-8-8870

加入者名：UNHCR

「通信欄」に「ティモール」と明記してください。

UNHCR 東京事務所に新代表着任

UNHCR日本・韓国地域事務所の新代表として、カシディス・ロチャナコン（Kasidis Rochanakorn）が、トローラー前代表の後を継ぎ、8月23日に着任した。

ロチャナコン新代表は、日本での仕事の抱負を次のように語った。

「長年にわたるUNCHRへのご支援に対し日本の皆様に感謝の意を表したい。日本政府は、世界第2位の資金拠出国であり、民間からも非常に寛大なご支援をいただいている。日本の人道的介入や日本の官・民（NGO）による難民援助活動がより一層、国際社会の中で競争力を持ち、専門性を高め、“目にみえる援助”となるよう私の援助経験、特に緊急事態に対応してきた経験が生かせればと思う。」

新代表は46歳でタイ国籍。チュラロンコン大学で政治学を学び、フィリピン大学を経て、米国ミズーリ中央州立大学で政治学修士号を取得。

1979年、UNHCRに入り、南西アジア地域事務所、パキスタン事務所、ジュネーブ本部、スリランカ事務所を経て、タイ事務所代表補佐、中国事務所代表、ジュネーブ本部、南東アジア・北アフリカ・中東地域局課長を歴任。東京赴任前は、ジュネーブ本部で緊急事態即応課長を務め、今回のコソボ危機にはマケドニアで緊急援助チームを率いた。家族は夫人と1男１女。

読む資料・見る資料

さしあげます

季刊誌

●「難民 Refugees」 ―― 難民問題の現状と保護・援助のあり方をめぐる情報誌。特集には難民保護と国際社会の対応、人道援助活動をめぐる将来の展望など、各層の視点を紹介します。

ニュースレター

●UNHCR News（現在の難民の状況とUNHCRの援助活動）

パンフレット

1 難民女性とは ―― 難民の８割をしめるのは女性と子ども。暴力の犠牲となりやすい女性たちの実態を取り上げます。

2「リーフレット」 ―― UNHCRの活動や難民問題の解決方法などを、イラスト入りで簡単に紹介しています。

「わたしたちの難民問題」 ―― 大学生などUNHCRの若いボランティアが中心となって高校生向けにつくった入門書。（「僕たちの難民問題」改訂版）

「難民問題の手引き」 ―― 「難民問題の現状」「地域別にみる難民問題」「UNHCRの活動」などを教師向けにまとめました。（14頁）（在庫切れのためコピーをお送りします。）

「難民の子どもたち」 ―― どうして難民になったのか、逃げる途中でどのような経験をしたのか、キャンプではどんな生活を送っているか、そして将来の夢など、子どもたちの声が聞こえてきます。小学生から高校生向け（20頁）

●数字で見るUNHCRの活動
●UNHCRの概要

1. 絵画ポスター ―― アフガン難民（12歳）とスーダン難民（17歳）の描いた絵画をポスターにしました。サイズA2（42×59cm）
「あなたの子はこんな絵を描きますか」

2. ポスターセット ―― 難民地図、UNHCRや難民などについての説明と写真で構成したセット。10枚一組。サイズA2

3. コソボ難民ポスター ―― マケドニアに逃れたコソボ難民のキャンプとコソボ国内避難民の写真。2枚一組。サイズA2

募金箱 ―― 難民援助の募金にご協力ください。
●ボール紙製　8.5×18×13cm
●プラスチック製　8.5×18×13cm
※プラスチック製は折りたたみ不可
詳しくはお問い合わせください。

お貸しします

展示用パネル ―― 文字、写真パネル、世界難民地図を合わせ29枚が一組です。（68×47cm 2箱に収納）
※貸し出し希望期間、使用目的、主催者をお知らせください。（ご要望が多いため、2か月前にはお申し込み下さい。）

ビデオテープ

1 日本語吹替え版・字幕版
●ほんのちょっと変えてみよう（14分）
2 日本語吹替え版
●世界の難民はどこに'97-98（17分）　●難民女性（13分）
3 日本・韓国地域事務所制作
●難民もみんなも同じ地球人（19分）中学生向き
4 新作　日本語吹替え版
●難民になるって、どういうこと？（15分）

UNHCR日本・韓国地域事務所はホームページを開設しています。ぜひご活用ください。
http://www.unhcr.or.jp

お問い合わせ先

UNHCR（ユー・エヌ・エイチ・シー・アール）
日本・韓国 地域事務所 広報室
〒107-0052 東京都港区赤坂8-4-14
TEL03-3475-4882
FAX03-3475-4884

資料や募金箱は、基本的に無料です。ただし送料と、資料枚数の多い場合はコピー代がかかります。広報室宛に、ご質問も含めて官製はがきでお申しこみください。できる限り「着払い」（宅急便または郵便小包）をお願いいたしますが、ご無理な場合、送料分の切手を、資料受け取り後、同封のアンケートと共に広報室宛てにご返送ください。

UNHCRニュース No.12
1999年11月
●発行
UNHCR日本・韓国地域事務所
広報室
●郵便振替
口座番号：00190-8-8870
加入者名：UNHCR

表紙写真
左上：旧ユーゴ紛争によって分断したスルプスカ共和国とボスニア連邦を結ぶバス路線。
UNHCR/B.Bizot
左下：コソボ北部の町ミトロビツァ。故郷にもどったアルバニア系住民によって略奪され、燃やされるロマ系住民の家。
UNHCR/R.LeMoyne
右上：西ティモールから故郷へ戻るため、UNHCRの用意したC160輸送機に乗り込む東ティモール難民。
UNHCR/F.Pagetti
右下：東ティモールの中心都市ディリに帰り着き、トランジット・センターに向かう難民。トラックは肉親や友人を探す群集に囲まれている。
UNHCR/F.Pagetti